

## 牡猫タケシ

志村 良知

ネットの国立極地研究所のサイトで初期の南極観測隊の写真のページに突き当たった。私は小学生のころから南極が好きで、関連の本も第一次越冬隊の隊長だった西堀栄三郎氏の「南極越冬記」を始めかなりの冊数を読んでいたが、その私も見たことの無い写真が多かった。

「南極越冬記」によると、第一次越冬隊では、置き去りで有名になった使役用のカラフト犬十八頭だけでなく、ペットとしてメスのカラフト犬のシロ子、カナリヤ二羽、それに牡の三毛猫タケシが一緒だった。

観測隊長永田武教授の名代、タケシは昭和基地の守護神だったが、ある日感電事故で瀕死となる。「南極越冬記」ではタケシの容態が悪い、とだけあって、その後どうなったかどこを探しても書いてない。これは気になる。

西堀氏は後に品質管理の権威として名を馳せ、私も氏の講演を聴いたことがある。元南極少年としては生きて動く西堀隊長を見ているだけで感激一杯、講演内容は上の空だった。ただ、講演のあと「猫のタケシはその後どうなりましたか」という質問はかろうじて思いとどまった。

それが極地研のサイトに、基地から宗谷に回収された時や、帰国船上のタケシの写真があったのである。タケシは生きていた。私は感激のあまり、そのサイトの質問ページに質問ではなく感想だとして、南極越冬記の記載のこととタケシの生還を喜ぶメールを送った。

すると何ということでしょう、第56次越冬隊長だった三浦広報室長（当時）から直々の返信が来たのである。「西堀隊は極地研内部でも既に遠い伝説、そこでの椿事、タケシの感電事故を覚えていてくれてありがとう」という内容だった。三浦室長はこのあと、「プラタモリ」の南極編で案内人として登場した。番組を拝見した旨のメールを送るとすぐ返信が来た。非常にまめなお方のような、ファンレターを乱発して老人の趣味に付き合わせてははいけない、とその後メールは慎んでいるが、南極と繋がりができた気分は続いている。